

祝賀會場に到るまでの提灯行列を行ひたるか
 、その数凡そ三百、過道より見る白人黒山の
 如く、笑の声を發して一行を歓迎せし、行列は
 グラウンドを一週して、力十萬歳を三唱した
 る後解散せられたが、午後十時より館内に於て盛
 んちをだてあり、午前四時に到るも尚ほ散會
 の様子見えたり、口當日邦人の建設せる大ア
 ー、それに揚けたる山家氏意匠の巧妙なる
 額面、昼夜に亘れる折揚花火、井上氏の大
 ー、夜間の提灯行列はいづれも大成功を

10X20

84

西展聯合協定

養し、非常なる讃歎と満足とを白人間に与へ
 得たるものあり。祝賀會に於ける晴れやか
 なる候しは殆ど邦人の年に絶えたるの觀あり
 て平素白人間に小くありて在留せる邦人も
 此日一日は毫も遜色を白人に示さず我も亦大
 國民の一員たりとの自覺に促かされ、然とし
 て彼等と立ち交る能くありたるは、邦人が當
 日の祝賀會に参加して認め得たる最も著しく
 最も爽快なる成果ありき。

10X10

85

フレカ沿岸日系農家聯合協議会

ハネ農会が組織せらるゝと、直ちにミツ

エミエ、オノノ、ハミエトの日系農会に

呼かけ、農村問題の研究改善に乗り出した

一九二〇年十二月十五日ハミエ農会を以

三回目の協議会を開き、出席代表は、

ハネ農会、井上、岡、吉津

ミツ、ミエ農会、藤野、橋詰、植田

オノノ、ミツ農会、新、益田

ハミエ農会、三井、川本、松本、高橋

10x20 36

人協議事項
一、霜害預防に關する建議案
二、在留婦人の服裝改善及び過激勞働禁止の件
三、在留婦人の衛生状態改善の件
日決議は、日本協議會は特別委員四名を選定し、
一、霜害預防の研究に當る事、但し該委員は各
農會の會長に選任する事、
二、在留婦人が一
見、之を在留地の善良なる風俗に感服せしめ、服裝
を改し、若し人は過激勞働に從事するは對白

10x20

87

人關係上不得策と認む。因つて本協議會は、
斯る風俗の改善を期する事。(三)在留邦人の衛
生状態に關する注意甚だ不徹底あるものあり
今後充分の改善を期する事。(四)次回協議會開
催地をオノヅクと定め、期日は一九二二年一
月廿二土曜日と定む。
附記ハその項ハネーの幹線大通りに面した所
で日曜日。一日日本人が爆薬をばんばんかけ
て開墾する。白人は着飾つて教會に行く。
余中で二の日本人に「今日は日曜日だから

一	仕	日	と	一	り	ん	は	玉	う	一
九	る	本	考	一	返	だ	字	、	た	九
二	を	人	へ	一	し	一	う	初	た	二
〇	休	は	て	一	た	フ	ね	犯	〇	〇
年	み	キ	い	リ	〇	デ	ば	だ		
三	あ	リ	た	ス	そ	ス	あ	か		
月	さ	ス	ら	マ	の	ト	ら	ら		
廿	い	ト	レ	レ	白	で	ぬ	兄		
六	し	教	く	、	人	も	、	の		
日	と	た	フ	ア	は	誰	こ	か		
、	優	け	ミ	イ	す	を	北	レ		
晚	と	が	一	、	ぐ	カ	は	で		
市	く	日	、	ド	電	ナ	法	貰		
ス	い	曜	フ	レ	話	ダ	律	っ		
タ	う	さ	デ	ケ	で	の	た	た		
レ	と	休	ス	ヤ	思	日	し	る		
レ	、	む	ト	レ	査	曜	と	件		
一	そ	もの	、	と	を	出	大	か		
公	の		エ	や	呼	場	眼	あ		
園										

10X20

81

に於て、日本人義勇兵記念塔の除幕式があつた。

一、ネー日本語学校

一九一四年頃、田村弥左エ門氏に、学齡児

童が三人あり、日本語を教へてもらつたといふ

ころ、その頃日本の女学校を出て、来た矢野

久夫夫人が、自宅を公立学校の放課後二時

ばかり一週二回教へていた。学童が段々増す

ので、家庭教授は不可能になり、一九一七年

から日本人倶楽部に、新来の吉野元一夫人（

東京ミッシェル、スカーレル出）が正式に教師

10X20

90

とあつて教へていた。一九二〇年三月、吉野
 夫人辞任し、中山吾一氏（当時、ホーハ
 スクリル通字中、後に聖公會の牧師とあつた
 人）就任。一九二二年十月辞任され、その後任と
 して、師範出の久保幸江氏就任。一九二
 一年半で、八年間教鞭をとられ、この間児
 童の増加で一、九二七年から一九二九年半で
 吉野元つ夫人助教、久保幸江校長辞任と同時
 に二月より吉野、崎山兩教師が責任を持たれ
 た。一九二九年、吉野、崎山兩教師辞職せら

10X20

11

北
た
の
心
。 後
任
と
し
て
立
教
大
学
者
の
有
賀
千
代
吉
氏
夫
妻
を
迎
え
た
。 同
氏
は
一
九
四
二
年
強
制
立
ち
退
き
ま
で
へ
そ
の
二
世
指
導
に
足
を
酔
せ
し
北
の
。 語
学
校
の
教
授
時
間
は
一
九
四
七
年
頃
は
。 公
立
学
校
の
休
日
即
ち
土
曜
日
曜
の
二
日
だ
け
終
日
教
へ
る
。 左
の
。 週
間
は
教
へ
る
。 所
か
つ
た
か
。 一
後
に
日
曜
日
の
。 教
授
を
辞
し
、 木
、 金
、 土
と
公
立
学
校
放
課
後
三
放
教
へ
る
事
も
あ
り
、 教
師
の
都
合
で
週
間
日
公
立
学
校
の
放
課
後
教
へ
る
。 左
の
へ
そ
の
。 大
体
と
し
て
一
週
二
日
、 教
授
時
間
四
時
間
を
越
え
る
。 程
度

10X20

92

を教えた。それ以上は児童の健康に無理と考
へられた。一、言語学校の教育方針は、その
項流行の「大和魂」とか「日本精神」とかい
うものには偏りなく、力十々の公立学校と歩
調を合せて「善き力十々」市民に養成の線に沿
う。日本語を教へた。それ故教科書は加例を
編纂された。読本を使用し、日本の国家を日
守り、教材の如き。有賀校長が力十々の道
徳律や英字の勅諭、力十々の法律などを撰
集し、日本語に翻訳をせざる。精神的に力

10x20

93

十加^町民に有る自覚をもちせらるうに指導し
た。また度々お話し合ひ、他校生徒と対校討
論会をして、日本語の活術や発音を練習させ
た。広い地域に散在する農村児童を一所に
集める事は地理的に非常に困難であり、本校
より三哩東に吾教の児童がいるために、分校
を設け（一九三三年）別に専任教師をおき、
本校と連絡を保ちつつ教を授けた。
へ、最も急がなければならぬ。生徒の子弟に日本
の文部省読本を教える事の不合理的を主張し、

10x20

(94)

加州読本を始めから使用していった。バ
バの識者間でも、その真に気付き、力
にふさわしい教科書を編纂する委員
会を作り、三千余冊使ったが、遂に完
成するに到り、あ
かした。この農會は最初から文部省
読本は不可成なるを主張して、いた
る。その新教科書編纂運動を全
的に支持した。米玉加四で
は十数年前に既にこの問題にぶ
つたり作つたのが、加州読本
の如きものである。

10x20

95

△ 一九二二年十月の定期総会に於て役員改選の
 結果、名譽会長井上次郎、会長矢野誠治、副
 会長小樋与平、幹事岡田四郎、会計田村弥生門
 △ 同年十一月の役員会に於ける決議として、排
 日運動が各地に起る実状に鑑み、村内各区に
 小集會を催し、一在當面風化しする者
 めの啓蒙講演會を開く事とし、講師として井
 上、山家西氏に依頼した。

△ 一九二二年、英仲買商、エセツト、エズト、
 ガラズドト、ノー農家との合資にて、パズフ

10X20

96

井ノ口、ベリ、ク、ア、リ、會社を組織し、年々増加一途にある。苗の販路を拡張する。とある。その頃、日、白、苗農家は、個々の競争力、年々激しくあり、共、敗死の現実に直面して、このためである。

一九二三年、十一月、日本人主母、年、生れ、初代會長は、土屋一逸であつた。主として、定着農夫のための英語夜学校、娛樂慰安の仕事をしたり。

大正十二年の関東の大震災には、救恤金六萬九千兩を集めて、領事館を助けて、金にした。

10X20

97

同年日本人農村聯合協議会を開き、組合組織を
 奨励し、個人出荷に依る市場の混乱を起さぬ
 やう統一行動をとるよう各村に申合せた。
 一九二五年一月八日モロト農会ホールで同標立
 意の協議会を開き、領事、日会長、新夕記者
 なども招待して組織運動を奨励して貰った。
 その日の農村代表出席者は
 ハモロト、吉橋、松本、大池、奥川、
 ベネ、吉野、広渡、神崎、久保、
 ミヤ、中島、池淵、藤野、白川、

10X20

98

オノツク、庄司、前原、夏原、
一九二六年、久しく懸念にあつていた農舍木
一、ル新築工事は九月一日に起工し、同年内に
竣工した。有給棟梁が二、氏、助手古賀四郎
氏、以外は全部会員の労力奉仕で出来た。間
口井、奥行き六十呎、二階建ての二階を木
一とし、階下を語学校、幼稚園、四千、治
療室、フワボス室等に使用を出した。この木
一は附近白人農家の社交クラブとして永年使
用された。総工費三千余弗、建築委員長井上

10X20

99

次郎、工事主任山家安太郎。同年十月落成し
 村内多岐の有志を招いて盛大に開館式を挙
 げた。
 同年三月六日、井上次郎氏宅全焼の危に會つ
 たのを、有志談合し、新宅を建てて火事免れ
 とし、芝居止むことに決めた。
 同年語学校生徒は廿五名に増へ、教師久保寺
 ちかえ先生。農舎の方針として語学校生徒に
 は日中の面会祭日は守らせぬことにした。

10x20

100

P
T
A

公立学校父母教師会（PTA）
初期の移民の子供達は、家庭で英語を話さ
ないのて、公立学校に入学しても、便所に行
きたくても言えなくて、教室に漏らして教師の
いうことも判らなくて教師は非常に困まし
た。一家庭の二人目の子供からは就学までに
兄弟から普通語を習うから問題はおくた
また。また親達も力太の生活や教育につ
いては何も知らなくて、衣服、辨当、行儀
などについては時々問題が起つた。それ
に当分の

10x20
a-1

の結果として幼い子供達の魂に、一
か芽生へる。これは将来善良な力と
上に由々しい問題である。筆者はワ
人と相談の上、ロビリン校に一九二
月から、父母教師会を創始した。何
の判りぬ母たちの集合の度に協
通訳し、日本語で説明。二語の會を
返して、いり中に、日本婦人達も、
予を眼で學びとつた。そして、
学校の催し事に、ほ佳んを寄附し
た。

10x20

0-2

それを数ヶ月続けよう
 中にも、日系の児童は
 自分の母語が、白人婦人
 と共通の学校で化す
 に奉仕するのを見て、一
 日系児童の表情に劣
 等感、は完全に消えてし
 まった。と同時に親達
 の大人教育に、婦人の収
 獲があつた。二の効
 果を、児がピリテ、エ
 ン、運動に能う限りの
 余力を捧出、口ど、リ
 ン、校以外のハ、モ
 ンド校のようには、日
 系生徒の母、小学校の
 ビ、
 テ、エ、の集まりにも、
 子供の親達を連れ出
 席し、通辯の労をとつた。

10X20

11-3

然村の学務課の人々や各学校の教師その他の
村有志と知り合ひ、日本問に好ましかる行
為ある場合は、ピレエに内々通知して
人水に表したるにせし、内内で解決した事件も
一、二をばあつた。日本人間にピレエ
運動を始め、その効果を見るにつけても、
この運動は英語を解せぬ母達から、段々成長
する姉達に引續いて、やつて貰ひたい希望をわ
ちがかり、その実現前に義憤の爲めに中止と
あつた訳である。

10X20
a-4

一字
下

ハワイ日系人事情
一九廿六年一月ツレオハレト教育令は、
領事館の小川書記生を招いてハワイ二世の
現状について講演を聴いた。
一九廿四年調査でハワイの総人口は三七八
、九四八人の中日本人は一四、八千人。日本
語学校一六八、生徒総数四万九千五百九十九人、
ハワイには佛教の勢力が頗る強大で、宗教関
関の学校も四十あり、一二八校が他立である。
ハワイの二世中毎歳六人、公立学校教師

10x20

A-5

△

五六三名、警務官二〇名、通譯四〇名、菊科
通譯六二名、神官一名、牧師六名、布教師五
名。ハワイでも從來の日本語読本では思想
のみにいかなしといふので改革をして、保
前加へ非常な迫害を受けた人々を助へて
見て見れば、先見といふか善かつたと思ふ。
一九二六年三月の総令に授出された生活改善
の資料等はたの通りで、これを一に授出され
としてつて、一に協賛會へ授出され、通過した。
一、結婚回へ、一、婦人會を備へ、四、並、一

昭和十一年

日、白、金、證

10X20 11-6

帳本を使用する事。

二、葬儀、祝儀に際し、成るべく日本人ホー

ルを使用する事。

三、葬儀に際しては、故人を記念することを

主とし、おとぎを全廃すること。

四、結婚の際の結納金の交換を全廃する外、

酒を用いる場合は、乾杯程度に止むること

五、香々移婚夫婦将来のために出来たけ飲具

素を留とすること。

六、この生活改善運動も、各村聯合協議会を通

10x20
a-7

過はしたか、結婚式は「一生一度した」とい
、葬式は佛の冥福をためという理由で、誰か
らとはおしに虚栄、虚飾の競争に立ち戻り、
我夫婦や、遺族がその狼費のために永年苦し
まねばならぬ結果に逆戻りした。
一九廿六年、再び小川書記生を招擧して国籍
離脱に関する説明を聴く。従来日本人が力
々に帰化した者は当然、日本国籍を離脱すべ
きものがあるが、日本政府では届出が無けれ
ば判らぬ。結局二重国籍にある、これは西

10X20
118

五の人口に二重にあらうてゐるから是非五籍離
脱届けをしを貰ひたい。この問題は廿五
年後の今日尚未解決のやうである。
一九廿七年六月、過去年間、合同教員の
婦人指導部デオル女史は、ネー幼稚園
監督及びネー婦人指導のため永年各解さ
れまいたが、老年退さるることにあつたのを
へネー農舎には女史の爲めに送別会を開き
感謝状と記念品を贈呈した。表の
幼稚園

10x20
0-1

一九二四年、加部の排日土地法が通過して
から、排日の波動は漸次止にして、遂にビー
ビー波に波及し、学童隔離教育問題が浮き出し
た。即ち晩市のハドソニ校では日系児童が白人
人娘に懸書を渡したとかの理由、リッパモリ
ド、マーホーランドでは英語不解の漁者の子
供が多くて、教師の手をとり過ぎ、白人児童
に悪影響を及ぼすといふのが表面の隔離教育
の理由であつた。これは児童教育上一大牙を

10X20

Q-10

の、領する心配し、美似教會の信託監督オ
 スターハート博士や聖公會のケネディ長老オ
 どの幹旋によつて隔離教育を実施する事知に
 はいかかがつたが、日本人側は子供の年齢前
 に英語教育をする約束でなす解決した。その
 結果として日本人農漁村各地に幼稚園を開設
 する事になった。一八一に於ては、一九二六
 年の暮から準備をし、農會新築ホールの翌年
 一月十日に開園式を行つた。その当時の児童
 調査に依ると三才以上が廿五名あり、養育

10x20
11-11

五才以上の在記二十一	あつた。一九二七年一月入園、教師ホステル夫人	三谷タツエ、宝町マツエ、山崎高明	山島功下、森スエ、井上ヒデ	宇都宮タエ、坂田ハツエ、日夏和雄	山田行雄、山崎英雄、田村ヒデ子	伊藤カチエ、谷口カチエ、宮崎守	宮崎マツエ、松岡人穂、久永ふみ	井上、磯島、岡田克己	多田、子、ヤ、ロ
------------	------------------------	------------------	---------------	------------------	-----------------	-----------------	-----------------	------------	----------

10X20
15-12

う
に
た
の
メ
ー
プ
ル
リ
ッ
グ
村
江
子
務
保
は
農
会
の
努
力

この幼稚園は他の地方も同様、力十分合同教
育婦人伝道会から教師、教材の供給を受け、
農会が教室、教員一切を準備し婦人伝道会の
監督指導の下に経営せられたので、この幼
稚園開設について居力奉仕を続けたのは
木下蔵、山家守一郎、難波豊登の三氏と、合同
教会から任命された教師には、ポステル夫人
、クリステル夫人、ミズナ
波、ミスキエ知事を送迎し一九四二年に
うねたのメープルリッグ村江子務保は農会

10x20
(113)